



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Study of Factors to Promote Participation in Pro-Poor Tourism, One of the Measures to Alleviate Absolute Poverty [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	若杉, 雅史
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16326号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95261
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	WAKASUGI_Masashi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：若杉 雅史

学位論文題名

Study of Factors to Promote Participation in Pro-Poor Tourism, One of
the Measures to Alleviate Absolute Poverty
(絶対的貧困の緩和策としてのプロプア・ツーリズムへの参加を促進する因子の研究)

本研究は、プロプア・ツーリズム（貧困削減を目的とした観光）への参加を促進する因子の定量研究である。共感（独立変数）や社会規範と個人規範（媒介変数）がプロプア・ツーリズムへの参加意図（従属変数）に与える影響を調査・分析した。プロプア・ツーリズムは向社会的行動(prosocial behavior)の一つである。向社会的行動の代表的な動機として共感と規範が挙げられるが、それらは個別に研究されており双方が互いの研究に着目しているレベルに留まっている。一方、本研究は「共感の感情的要素がトリガーとなって規範の理性的要素に作用し、行動意図を促進する」可能性に着目した。また、本研究の調査対象であるプロプア・ツーリズムは他の準拠集団への向社会的行動である。この点も先行研究と一線を画している。

研究目的を達成するために3回のアンケート調査を実施した。それらの研究成果をもとに本論文は構成されている。研究1は、共感の感情的構成要素の一つである共感的懸念(empathic concern)を独立変数、社会的規範と個人的規範を媒介変数とし、これらの行動意図への影響を調査した。研究2では、もう一つの感情的要素である共感的苦痛(empathic distress)を独立変数とした。これらの研究では、被験者がそれぞれ共感的懸念と共感的苦痛の感情を意識したときの行動意図への影響を観察しているが、これに対して、研究3ではこの二つの感情的要素を独立変数として採用した。三つの研究結果は、社会におけるプロプア・ツーリズムの認知度の現在地や、それに対する効果的な促進因子の利用を提示した。本論文は6つの Chapter と References で構成されている。

Chapter 1. Introduction では、本研究の背景、目的、意義を述べている。世界では7億人以上の人々が絶対的貧困下で暮らしている実態、及びその軽減策への世界的な取り組みと問題点を紹介している。その中でも、旅行産業、とりわけプロプア・ツーリズムの有効性とその促進因子としての共感と規範に言及している。また、その社会的認知度の低さからプロプア・ツーリズム自体を研究対象とする是非にも疑問を呈した。結果的には、研究1、2ではプロプア・ツーリズムの代替案として絶対的貧困への寄付を調査対象として採用し、その分析結果をプロプア・ツーリズムへの参加意図に解釈するところを試みた。また、本研究の目的である「他の準拠集団への向社会的行動を促進する因子の研究」は、他の国際的諸問題（例えば、地球温暖化、海洋汚染など）へも適用できる可能性を示した。

Chapter 2. Literature Review では、共感と規範を中心とした潜在変数について、その構成要素毎に分解して先行研究を分析した。例えば、共感であれば、共感的懸念と共感的苦痛、認知的要素と感情的要素、状態共感と特性共感などの次元がある。規範では、社会的規範と個人的規範、命令的規範と記述的規範など（それぞれ、認知的要素と情動的要素を含む）が挙げられる。また、これらの因子に調整変数として影響を与えるバイアスや各種要素についても検討した。これらの分析を踏まえ、本研究における基本的な Hypothetical Normative Decision-Making Model を示した。このモデルを基本に、3つのアンケート調査が設計、実施された。

Chapter. 3：研究1では、共感的懸念を独立変数、社会的規範と個人的規範を媒介変数、絶対的貧困への寄付を従属変数としたシンプルな構造のアンケート調査を実施した。構造方程式モデリング(SEM)は予測しなかった二つのパスを示した。一つは独立変数から従属変数への直接的なパスで、感情的要素の影響力を示した。もう一つは、先行研究(例えば、Schwartz & Howard, 1984; Cialdini et al.1990)では見られなかった個人的規範から

社会的規範へのパスである。しかしながら、潜在変数の数の少なさから、それらの分析は予測の範疇を出ず、詳細な分析・検討は出来なかった。

Chapter. 4 : 研究 2 は、研究 1 の結果を踏まえて設計された。共感的苦痛を独立変数とした。また、社会的規範は命令的規範と記述的規範へ、また個人的規範は肯定的及び否定的個人規範へと、それぞれ分解し四つの媒介変数を採用し、絶対的貧困への寄付意図（従属変数）への影響を調査した。その結果は混乱を招くものだった。**SEM** は命令的規範からのパスが否定的個人規範と記述的規範を経由して、再び命令的規範に戻る非逐次的な概念サイクルを導き、先行研究（例えば、Cialdini et al.,1991、命令的規範と記述的規範は個別に機能する）とは異なる結果を示した。ただし、多くの先行研究は社会的迷惑行為を調査対象として、それを抑止する観点から研究をしている。一方、本研究の対象は向社会的行動を促進する観点からの研究である。これらの違いを考慮する必要があると考察された。

Chapter 5 : 研究 1、2 を踏まえて、2 つの独立変数、4 つの媒介変数、2 つの従属変数（絶対的貧困への寄付意図とプロプア・ツーリズムへの参加意図）を用意して調査した。調査結果は 2 つの独立変数間の強い相関性を示し、先行研究(例えば、Batson et al,1987; Hoffman, 2000)を裏付けた。また、共感的懸念と共感的苦痛を 1 つの独立変数として実施した **SEM** は、絶対的貧困への寄付とプロプア・ツーリズムは社会的規範として認知されていないことを統計的に明示した。

Chapter 6. Discussion : 3 つの研究結果を中心に、本研究の目的である「共感と規範の組み合わせが従属変数に与える影響」を総括し、従属変数の認知向上に向けた取り組みの必要性や、本研究結果のマーケティングへの応用の可能性を示した。

以 上